

神様お願い（一）

今日 あした

あゆみは玄関の上がり框に置かれた白木の仏壇と神棚を見て、玄関先に立っている兄の雄大に目を移した。

「仏壇も神棚も、此処から離れたくないのじゃないか。お前だってここに置いておけば寂しくないだろう」

ぽかんと口をあけたまま、何も言えないでいるあゆみに向かって雄大は

「じゃあな、俺は行くから。寂しくなったらいつでも遊びに来て」

母屋に住んでいた雄大一家の引越しの日だった。あゆみは仏壇や神棚の事は、長男の雄大がそう決めたのだから何も言うまいと思う。せめて門まで見送るつもりでサンダルを履いて、雄大と一緒に母屋の方に歩き出した。

「考えて見れば、あゆみはこれまでずっと親と一緒にいられたのだから、仕合わせだったよな」

「……そうね」

引越しはもうすっかり終わったようで、門の外にポストンバッグ一つを持った兄嫁の桃子だけが待っていた。

「お義姉さん、雄一君や雄二君とは別々に住むのですってね」

「ええ、これからはマンション住まいでしょう、それに子供達も二十を過ぎたんだから、親離れ、子離れよ」

義姉の快活な声が返って来た。

二人が角を曲がるのを見届けて、改めて開けたままになっている檜の門を眺めると、金木犀のにおいがかすかに鼻を衝いた。もう秋なのだ。

「私は親が死ぬまで親離れが出来なかったのかなあ。生まれた時から見ていたこの門も、もう我が家のものではないんだ」

あゆみは少し感傷的になりながら、自分の住居として残した三十坪の土地に建つぼろ家に向かった。

ここは、もとはと言えば、兄妹の親のその又親から受け継いだ家だった。離れは、祖父母が健在だった頃に建てたものである。

時は移り、祖父母が他界して母屋は建て替えたが、もう誰も住まなくなった離れは取り壊される事もなく、不要になったものを入れておく物置のようになっていた。

やがて、雄大は就職をして家を出て行き十数年が経ち、父親が亡くなった。母親とあゆみが二人で暮らすようになる、雄大が妻と二人の子供の一家四人で引っ越してきた。そこで、母親とあゆみは離れに追いやられた形で、物置状態になっているところを改築して移り住んだのだった。

夏の始めに、母親は長患いをする事もなく、九十歳で天寿を全うした。時にあゆみは六十二歳。五十五でデパートを定年退職して母娘二人で旅行もできたし、思い残す事もなかった。そして神道の葬式。

葬祭場では神前に野菜や果物を捧げる。神主が白足袋に雪駄を履いて現れ、水とお神酒をうやうやしく神前に置き、大きな榊で会葬者の頭上をお祓いする。祝詞をあげ、それが済むと会葬者に玉串が渡され、神前に捧げる。死者を納めた白木の棺も、緑色の榊も、死者が天寿を全うしたせいかわつしかなかった。

神道では、亡くなってから百日経つと、死者は神様になるそう。その百日祭をするまでの間、生者はしばしば修羅場をくぐることになる。

あゆみは、生前、母親に財産の管理を任されていた。とはいってもただ言われた通りにお金を動かしたり、貸金庫の出し入れをするだけの代理人にすぎない。

「雄大に頼むと、いちいちうるさいことを言うでしょう、だから、あゆみ、お願いね」と母親は言っていたが、銀行勤めの兄は本当にしつかりしている。

亡くなった知らせが銀行に届く前に貸金庫を解約し、預金通帳を全て解約するように言い、それが終わると、財産のすべてを兄妹で折半にした。

土地が百五十坪あったので、離れのある二十坪だけ残してあゆみの住いにし、あゆみの分として残る四十五坪を雄大の土地と一緒に売ってくれた。便利が良い住宅地なのですぐに売れた。土地の売り買いから、相続のことまですべて雄大が主になってやってきてくれて、修羅場は雄大ひとりで引き受けてくれた。

「これであゆみも老後の心配は無しだな」

そして納棺の後の百日祭が滞りなく終わって、すぐの兄の引っ越しだった。

あゆみは離れに戻ると、玄関に置いたままの神棚と仏壇を自分の机の上に移した。雄大はさっさと引っ越してしまっただが、何事もスローモーなあゆみの家は、母屋に置いてあった捨てられないもので埋まっていたが、日本間に置かれた母のベッドを片づけて、取りあえずその部屋にすべてを押し込んだ。

あゆみは今、母屋の門を使っているが、すぐにも出入りをする所を造らなけ

ればならない。神棚を置く場所はとうしよう、白木の仏壇はやっぱり母の部屋が良いかな……。そんなことをとりとめもなく考えていたら、離れに直接ついている呼び鈴が鳴った。

門を入ってここまで来るのは親しいものには決まっているが、母屋の引越しが済んだのに、誰だろうと出てみると、母が以前入っていた浄瑠璃友の会の紙谷さんという人だった。あゆみも何度か母と一緒に行ったことがある。

「以前お会いしたことがありましたね、紀尾井ホールでしたか、人形浄瑠璃の時でしたね」

「はあ……」

「お母様が亡くなられたのを聞いて驚きました。お母様には会の他にも色々な面で助けて頂いて……。本当に立派な方でしたね。お線香だけでもあげさせてください」

六十は過ぎているのだろうが、背が高く痩せていて学者のような風貌のノールな感じのする人だった。

あゆみは、散らかった部屋や、机の上に神棚と一緒に置いてある仏壇を思い浮かべて一瞬躊躇をしたものの、わざわざ来てくれたのだからと入ってもらったことにした。

「神道は、お線香ではなくて、お灯明を上げるのですよ」と言いながら、仏壇の前に置いてあるろうそくに火をつけた。

紙谷さんは、そこに「御仏前」の熨斗袋を置いて、目を閉じてしばらく合掌してから位牌だけが入っている仏壇をながめると、あゆみの方を向いて

「あなたも長い間大変でしたね。年老いていく人との生活は目に見えないご苦労があたりだったでしょうね。お家で見送られるのは並大抵のことではなかったでしょう」

紙谷さんにそう言われた途端、あゆみは不覚にも涙があふれだし……。そばにあったタオルで目を抑えても、言葉が出ない程、後から後からあふれ出す。初対面のような人を前に恥ずかしい。亡くなった時も葬儀の時も涙なんか出なかったのに。

母は長患いこそしなかったが、いつもそばにいた。自分の部屋にもテレビがあるのに、子供のようにあゆみの後を追っていた。もう何年も。

二三年前だったか、母が体中をかきむしり、血だらけになっていたので皮膚科に連れて行った。以前から乾燥肌だったのでその所為だろうと思っていたら、医者「これはストレスで掻いてしまうのではないですか。この薬を一日一本

「ずつ塗ってあげてください」と一ヶ月分、30本処方してくれた。

母は私の不満を感じて、不安だったのだろう。

その日から、毎日毎日朝起きた時に体を拭いてやり、身体中に薬を刷り込んだ。そして、あなたを愛しているのよと、心の中で言い続けた。そう言わなければ私自身、その場から逃げ出してしまいたいそうだった。

「大丈夫ですか」

紙谷さんが心配そうに、のぞき込むようにあゆみを見ていた。

何て優しい眼をしているのだろう。あゆみは紙谷さんの目を見たまま一瞬、時を忘れた。

「あ、ごめんなさい、もう大丈夫です。コーヒーでも淹れますね……」

慌てて台所に立って深呼吸をした。冷静に！冷静に！自分に言い聞かせる。

「どうぞ」コーヒーを紙谷さんの前に置いた。

「母はもうずっと前に友の会をやめていますでしょう、亡くなった事、よくお分かりになりましたね」

「私もずいぶん前に友の会の方は脱退しました。会社を辞めてから妻に死なれましてね、余生は、何か人の為になる事をしたいたいと思ひまして、NPO法人のボランティア活動を支援する会に入会しました。もう年ですので力仕事は無理ですが、裏方の事務処理や支援者を募る事は出来ますので……。山口さんには随分助けて頂きました。沢山のご寄付も頂きましたが、ご子息の雄大様を通して義援金の振込口座のことなどご尽力いただきました。亡くなられたことを耳にして、ボランティア団体を通して雄大様にお悔やみに伺いたいと申し上げたら、妹様がいらっしやるので何時でもどうぞと言って頂きました」

「そうですか、母は皆さまのお役に立てたのですね」

あゆみは母に対して、温かい気持ちが出たと広がったように思えた。

年末年始を慌しく過ごし、金木犀の芽吹く頃には家の中もすっかり片付き、可愛い鉄柵の門も出来た。この際だからと家の補修も済ませ、内装の化粧直しもしたので小さな家は新築のようになった。

仏壇は、母の部屋の床の間にある飾り棚にぴったり治まったが、神棚を置く所がない。母屋では居間の高い位置に南向きに檜の板を吊り下げて祀ってあったが、新築同様になった家にはいかに古臭い。とりあえず居間のサイドボードの上に置いた。だが、その隣にテレビがある所為か、いつも目の片隅に神棚が見える。まあいいかと、毎朝水入れと榊の水を入れ替え、手を合わせている。

家もきれいになり、近頃は母のいない一人だけの生活にもすっかり慣れた。朝食が終わりモーニングショーをみていたら、電話が鳴った。

その時、目の端で神棚が蜃気楼のように歪んだような気がして、ストーブを入れる時期でもないのにと一瞬思った。

「はい、山口でございます」

「こちらは熊本地震の被災者を助ける会の事務局の渡瀬と申しますが、山口頼子さまはご在宅でしょうか」

「山口頼子は母ですが、昨年亡くなりました」

「そうですか、実は、熊本地震の後に義援金を募りましたところ、五十万円のご寄付をしたとの申し出がありました。事務局で整理を致しましたところ未納になって居ります。地震の後片づけに、まだまだいくらあっても足りませんので、こうして未納の方に一軒づつお電話をさせて頂いている次第でございます」

「でも、山口頼子はもういないのですから、寄付をしたくてもできませんでしょう」

「大変申し上げにくいのですが、山口頼子さまは約束をなさったのですから、お支払いの義務がございます」

「本人はもういないのですよ」

「これは、山口頼子さまの負債という事で、代理の方にお支払い頂きたいのですが、どうしてもお支払い頂けないなら、山口様は、NPOの紙谷さんを通して寄付の申し出を頂いたので、紙谷さんに弁償して頂くことになります」

あゆみの頭の中に、紙谷さんのあの優しそうな目が浮び胸の奥がキューンと痛んだ。

考えて見れば、あゆみはこれまで恋愛とは無縁の生活だった。顔も身体も小ぶくりで、鼻も口も小さいあゆみは引っ込み思案な子だった。ただ、二重瞼の大きな目だけは意志を湛えていて、自他ともにみとめる頑張り屋さんだった。

中学生の頃、体の弱い母を助けて、体調を崩した祖父母の看病をした事を憶えている。

デパートに勤め始めた頃、寝たきりになった父の介護を十年間以上、母と交替で会社も辞めずにやり通した。遊んでいる暇なんかなかった。

「NPOの紙谷さんの方にご連絡をして……」

そんなことになったら困っている人の為に頑張っている紙谷さんは私の事をどう思うだろう。

と思つた隙を見透かしたように電話の声は

「山口頼子さまは困つた人を助けたい一心で、ご寄付をお申し出になつたのだと思いますよ。御立派な方だったのでしょね。その方の娘さんでしたら同じ志をお持ちでございましょう。このように、一軒ずつ電話をする私共もすべてボランティア活動でございします。頼子さまのお気持ちはとても良くわかります。お立て替え頂くワケには参りませんでしょか」

「……、わかりました。それではどちらに振り込めば良いのですか」

「助かります。では熊本地震義援金受付、東京出張所のほうから、今日の午後受領証を持参しますのでその時によりしくお願いします」

電話を切つた後、ぼんやりと神棚を見たら、また揺らめいたような気がした。

「神様は、良い事をしたから喜んでいるのよね」

五十万円用意をして待っていると、その人がやって来た。三十前後のくたびれた背広を着た貧相な人だった。玄関先に招じ入れると、

「山口頼子さまがご寄付して下さつたお金を頂きに参りました、熊本地震義援金事務局の渡瀬と申します。感謝状と受領証を持参いたしました」

「お電話の方ですね、ご苦勞様。はいこれ、五十万円です」あゆみが差し出すと、交換のように感謝状と受領証を渡してお金を受け取ると、数えもしないでカバンの中に入れた。

「山口頼子が寄付を申し出た書付けはどうなるのでしょうか」

勇気を奮つてそう言うと、

「私の方で寄付して下さつた方の一覧表に記入してから大切に保管しますので、ご安心ください」

にこやかにそう言うと、笑つたまま後ずさりをして鉄柵の門の外まで出て深々と頭を下げた。

あゆみは部屋に戻ると、神棚の前に立ち両手を合わせて

「私はいい事をしたのよね。間違つていないわね。紙谷さんにご迷惑をおかけするわけにはいかないわね」

良い事をした筈なのに何だかスッキリしない。

二、三日すると、又、モーニングショーの時間に電話が鳴つた。又、神棚が揺らいで見えた。

「山口でございませす」

「世界の子供達を守る会の〇〇でございませす」

「はい……」

「世界の飢えた子供達の為に寄付を募って居ります」女性の声があった。

「私は、年末にユニセフに寄付をしたばかりです」あゆみは慌てて拒否の言葉を発した。

「アフリカでは本当に何もかもが不足しております、皆さまから頂いたご寄付は主に、医療や、空腹の子供たちの為に使われているのですが、砂地に水を撒くように、あつという間になくなってしまいました」

「はー、お気の毒ですが、もうこれ以上のことは……」

「私共も、ボランティアでこのようにお電話をさせて頂いています。一日中お電話を致してもほんのわずかのご寄付しか集まりません。五千円でも一万円でもかまいません。お願いします」

あゆみはうんざりして、もうこれ以上やり取りをする気力がなくなっていた。私は沢山お金を持っているのだから、寄付することなんか何でもないじゃない。「では、ほんの少ししかできませんが、振り込ませて頂きます。ユニセフでよろしいのですか」

「ユニセフとは別のボランティア団体ですので、今日の午後にも世田谷区周辺を廻っているものに取りに伺います。おいくら寄付をして頂けるのでしょうか」

「廻っているって、私の家をご存じなのですか」

「はい、山口頼子さまには度々ご寄付を頂きましたので、直接取りに伺ったことも何度かございます」

「紙谷さんのいらっしゃるボランティア団体ですか」

「はい。紙谷さんも頑張っていていらっしゃいます」

「それでは、一万円用意して待っています」

電話を切ってからまた神棚を見たら、ゆらりと揺れたような気がした。

紙谷さんに連絡を試してみたらどうだろう、という思いが浮かんできたのが、神様に言われたような気がした。連絡先……。そうだ「御仏前」を頂いた熨斗袋に書いてあるかもしれない。飾り棚に置いてある仏壇の下の物入れに入れてある箱を取り出してみたら、あることはあったが、裏には「紙谷しげる」とだけ書いてあって住所も団体名も書いてなかった。そう言えば、後からお礼を贈ろうと思って送れなかったのだった。

午後になり、真面目そうな地味なスーツ姿の女性がお金を受け取りに来た。一万円の入った封筒を差し出すと、お礼を言って受領証をくれた。それを見て「おたくは、紙谷さんが所属していらっしゃるボランティア団体だとお聞きし

たと思いますが……」

「いいえ、こちらに書いてありますように、非営利団体たすけあいの会でございます」

「では、紙谷さんの連絡先を教えてくださいませんか」

「今は、ちよつとわかりません。事務所のものに聞いてわかり次第、連絡をさせて頂きます」

「神さまあ」あゆみは呼んでみた。なんだかスッキリしないのよね。

『たすけあいの会』から何の連絡もないまま次の日になった。

また、モーニングショーを見ていると電話が鳴った。

「はい、山口でございます」

神棚がゆらりと揺れる。

「おう、あゆみか、俺だよ」

「ああ、お兄ちゃん、こんな時間にどうしたの」

「区役所に用事があるから、ついでにお前の所に寄ろうと思うんだけど、今日は居るか？」

「いる、いる。何時ごろ来る？ お寿司でも取るから、お昼前にいらっしゃいよ」。「おう」電話を切った。神棚は揺れてない、ような気がする。

あゆみが兄と会うのは引越しの日以来だった。

「いい門が出来たな」開口一番そう言うと、平屋の、離れたった家を見て

「綺麗になったな、金がかかっただろう」あゆみは何を言われても嬉しくてたまらない。久しぶりに会ったのだ。

梅雨に入る前の爽やかな日だった。金木犀を新緑の小さな葉が飾っている。

「この木が離れの方にあって良かったな」雄大が笑っている。

「入って。もうお寿司も来ているから。お茶を入れるね」

あゆみはばたばたと流しとテーブルの間を歩き来して、席に着いた。

座った途端、電話のベルが鳴りだした。又、寄付の話しかしたら、そう思っただらつと神様を見て受話器を取った。

「はい、山口でございます」

「かあさん、おれ、おれだけど……」

「え、番号をお間違いではないですか」

「何言ってるの、俺だよ」



「私には息子は居りませんが……」

「ガチャン！」

「あつ、切れちゃった」

「あゆみ、おれおれ詐欺の電話じゃないのか」

「え、そうなの。いやだあ」あゆみはそう言いながら「さあ食べましょう」とお寿司をすすめた。

「うまいなー」とパクパク食べながら、雄大は、

「あゆみも気をつけたほうがいいぞ、たまたま息子がいなかったから、俺って言われても引っかからなかったけど、俺なんかすっかり引っかかってしまったんだ」

「おれおれ詐欺に？」

「そうなんだよ。電話が鳴って桃子が出たんだ。そうしたら

『かあさん、俺だけ』って

『雄一、こんな時間にどうしたの』って桃子が言ったら泣きそうな声で

『客に預かった金をとられた』って、ほら雄一は卒業して銀行に勤めただろう、

『上司に言えないから立て替えたのだけ』

『いくらなの』

『五百万』

『そんな大金を……。待ってね、お父さんがいるから、今変わるわね』って、桃子は、おおよその話の内容を言いながら、受話器を持ってきたんだよ。俺もたまたま家にいたのだけど、居る時で良かったよ。必死で雄一を説得したんだ。

そんな嘘をついちやいけけない。ここで嘘をついたら警察にも届けられないじゃないか、盗られたのだろう、抵抗できなかったのだろう、上司に怒られても仕方がないじゃないか。一度嘘をついたら、何もかもにひずみが出るんだ。いか、雄一、正直に言わなければいけないよ。父さんも銀行員だ、お前の気持ちわかるよ。

説得している間も、泣き声を出してなんだかんだと言ってたけど、最後にはあいつも『うん、わかった』って電話を切ったんだ。それでも桃子と二人でどうなったか気になって、八時過ぎに雄一に電話をしたんだよ。そうしたら『えっ、何の話？ 父さん、それってオレオレ詐欺じゃないの、被害にあわなくて良かったけど、気をつけてよ』なんていわれて、立場なかったよ」

「そんなに雄一君と声が似ていたの」

「桃子も、俺も、疑いもしなかった。敵は上手いのだよ。あゆみも気をつけろ

よ。何て言えたものじゃないな」

「そうね。あ、話は違うけど、この間、お母さんの入っていた浄瑠璃友の会の紙谷しげるさんって方が、お兄ちゃんに聞いたからってお悔やみに見えたわよ」  
「なんだい、浄瑠璃友の会って、おふくろがそんなのに入っていたのも知らなかった。俺、そんな人知らないぞ。まさか詐欺に遭ったなんてことないよな」  
「まさかー。人品卑しからぬ人だったし、お悔やみも頂いたのよ」

「浄瑠璃友の会って、おふくろが入っていたのは何年も前だろう、何でそんな奴が今頃くるんだ？」

「何でもボランティアで人助けをしているって言っていた」と、紙谷さんが来た時の話をした。

「お兄ちゃんに義援金の受け入れ口座開く手助けをして貰ったって言っていたのよ。何で、紙谷さんは嘘をついたのかしら」

「知らないよ。熊本地震の義援金だったら無料で送金できる口座を銀行で用意しているから、そんな手助けをするわけがないよ」

紙谷さんは上品で知的な感じのする人だった。それに、何よりお香典だって頂いている……。でも……。そう言えばあの後から毎日のように、寄付の電話が掛るようになったんだわ。電話の人たちも、私が渋るといつも紙谷さんの名前を出したような気がする。でもそんな筈ないわよ。紙谷さんが悪い人の筈ないじゃない。

「どうしたんだ」

「んん、何でもない」

「紙谷って人に香典をもらったのなら住所くらい書いてあっただろう。調べて電話をしてみるか？」

「それが名前しか書いてなかったのよ」

「気をつけるよ。寄付でもしてくれって言って来るかも知れない。お前は金があるからって、ぱっぱと寄付なんかするなよ。お前の財産、俺が預かってやるうか」

「いえ、けっこうです。こう見えても私、しっかりしているのよ」

これからまだ仕事があるのだという雄大を見送って、あゆみは部屋に入ってドカンと椅子に腰を落とすと、神様と目が合った。合うわけないけど、今やあゆみのたった一人の話し相手なのだ。

ねえ、紙谷さんが怪しい筈ないわよね、そうだ、昨日、たすけあいの会の人

が、事務所に帰って紙谷さんの連絡先を教えてください……。こちらから電話をしてみよう。昨日貰った受領証に電話番号が書いてあるわよね。

「……」

あった、あった。えーと、03のおー0000ー0000

「ただ今、この電話は使われておりません。番号をお調べの上お掛け直し下さい」

えー、嘘でしょう――。

お母さんが寄付をするつもりだった熊本地震の方はどうかしら？

あゆみは仏壇の下に入れてあった受領証を見ながらダイヤルをプッシュした。

「はい、熊本地震の義援金受け付け、東京事務局でございます」

よかったー、こちらは騙されたわけじゃなかったのだから。紙谷さんのこともわかるかもしれない。

「先日、寄付金をお払いしました山口頼子と申しますが、うちまでお金を取りにお見えになった渡瀬さんはいらっしやいますか」

「はあ？ 義援金は振り込んで頂くことになっております。お金を取りに伺うような事はございませんし、渡瀬というものもおりません」

騙されたのはあゆみばかりではないのだろう。これ以上話すことはない、とばかり、けんもほろろに電話を切られてしまった。

あー、五十万円が……。

神さまあ――。

と、電話のベルが……

「もしもし」

「こちらは、イラン・イラク国境付近の地震で被災された方の為に」

「うるさくごー！」

続く